広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第64号　2015　73－82

国語科教育におけるマンガを活用した学力の育成

― 葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』の場合 ―

中　野　登志美
（2015年10月５日受理）

Upbringing of the Scholastic Ability that Utilized Comics in Education of National Language
― In the case of Yoshiki Hayama' "A letter from female laborer in Cement barrel" ―

Toshimi Nakano

Abstract: In a class that learners study about Yoshiki Hayama' "A letter from female laborer in Cement barrel", teachers reports the class has a lot of issues. In view of issues, this paper considers that teaching material value for this novel to aim at getting over the issues. As a result of having examined for teaching material value for this novel, I found that it's effective that guidance that was at the center on the third paragraph. Through Yozo' ststes of the characters, this paper presents some of the teaching methods that learners are able to read that they stare at their own reality on this one, besides, are able to criticize on the ideas for the society and way of life from this reality. When you take advantage of the comics in the classroom, it became clear that there was various effectiveness. When you read the comics, the more used part strategy, the more deeply you are able to understand on feelings of the characters in the novels. Put this in the field of view, this paper have devised an applied guidance that the strategy which you read a comic partially.

Key words: teaching plan of novel materials, study of the novel teaching materials, the comics, compare and read, scholastic ability to criticize
キーワード：小説教材の指導案，教材研究，マンガ，比べ読み，批評する力

１．研究の目的

葉山嘉樹の『セメント樽の中の手紙』は筑摩書房の『国語総合』に収録されている作品である（初出は1926年１月号の『文芸戦線』）。筑摩書房の教科書サイトのホームページにある国語総合編の「編集委員からのメッセージ」の中で編集委員の紅野謙介は「かつて『セメント樽の中の手紙』は筑摩の『国語』にとって定番教材であ」った。この度「あらためて光をあてるべき時代になっている」と考えて，「なつかしい教材」を「再登場」させることに決めたと明かしている[1]。確かに，『セメント樽の中の手紙』は1960年から1980年代にかけて幾つもの教科書に教材として採用されていた[2]のだが，次第に教科書から姿を消していった。再びこの小説が教材として選定されたのは，『セメント樽の中の手紙』に教材的な価値があることが再認識されたからである。

『セメント樽の中の手紙』は長谷川泉の「文学史的価値を担った新鮮な珠玉のような好短篇」[3]という指摘や，浦西和彦の「葉山嘉樹の成功をより確実なものにした短篇」[4]という指摘から窺えるように，この小説は葉山嘉樹の代表作のひとつとして位置付けられている。『セメント樽の中の手紙』は文学的な側面においても，教材的な側面においても「労働者の連帯」をテーマにした小説である[5]と見做されている。例えば，野中幸子は女工の手紙の中にある「労働者への連帯意

識」を学習者に読み取らせて，「現実を見つめる契機」となる読みを目指した授業実践を報告している[6]。野中と同じように青嶋康文も学習者に「現実を見つめる」読みを目指した授業を行っている。「与三の現実を通して自分の現実を見つめる」読みを目指した青嶋の授業[7]は，筑摩書房の『国語総合』の教科書編集委員である紅野謙介の「終身雇用制の撤廃とともに安定した仕事がなくな」って，「きちんと雇用されることのないまま使い捨てられていく」「八〇年前と変わらない労働の風景に，いまわたしたちは立っている」。したがって，現在こそ改めてこの作品を読むべきである[8]という考えに通底している。ここに『セメント樽の中の手紙』の教材的価値が認められている。しかしながら，青嶋の授業実践では「与三の現実を通して自分の現実を見つめることにできないかと思いつつ授業を進めたが，このような読み（稿者注・学習者が自分の現実を見つめることのできる読み）はＭさん以外に出てこなかった」ことが報告されている。青嶋は学習者の読みを重んじて，学習者の一次感想文と二次感想文を取り入れる授業を行った。学習指導として学習者の読みを深めるための発問をした後で，学習者に二次感想を書かせる指導をしている。青嶋は働くことの厳しさを知っている定時制高校の生徒なので，自分たちと似たような境遇の松戸与三を通して自分の生活を見つめ直すことを期待したが，力及ばなかったことを言及している[9]。野中も授業で「与三と生徒との立場の違いをはっきりさせることはできても，それ以上の発展は望めなかった」と報告している[10]。野中や青嶋の授業実践から『セメント樽の中の手紙』は読めたとしても，学習者が自分の現実を見つめられるような読みをするのが難しい教材であることが窺える。

そこで本稿では，登場人物の松戸与三を通して学習者が自分自身を見つめ直していく読みの指導を考案していきたい。さらに，『セメント樽の中の手紙』の教材的な価値を生かして，学習者の批評する力の育成を目指した指導についても合わせて考案することを目的としている。

２．『セメント樽の中の手紙』の作品構造

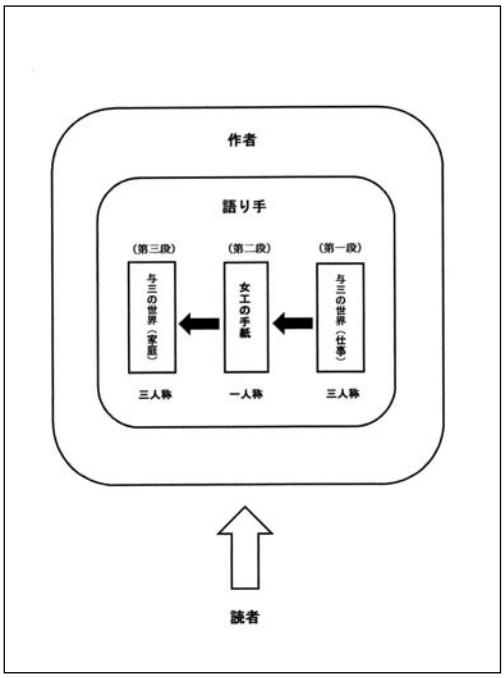
『セメント樽の中の手紙』は作品の内容と表現方法から三段にわけることができる。第一段は冒頭部分の「松戸与三はセメントあけをやっていた」から「彼が拾った小箱の中からは，ボロに包んだ紙切れが出た。それにはこう書いてあった。」までの部分である。第一段では発電所建設工事の過酷な労働条件の中で働いている与三がセメント樽の中から手紙を見つけるまでが語られている。十一時間もの過酷な労働時間の中で与三が休憩できるのは昼飯と三時休みの短い時間しかない。だが，短い休憩中に労働作業の下準備のためにコンクリートミキサーの掃除をしていて，与三は十分に休むことができない。残りの労働時間はすべて「一分間に十才ずつ吐き出す，コンクリートミキサーに，間に合わせ」ながら働くことを強いられている。人間が機械の支配を受ける逆転関係した労働実態の内実や，賃金のほとんどを米代に取られてしまって，一杯の酒も飲めないほど貧窮した生活をしている与三の行き場のない閉塞状況が三人称視点の語りによって明かされている。

第二段は「－私はＮセメント会社の，セメント袋を縫う女工です。」から「あなたも御用心なさいませ。さようなら。」までの女工の手紙の部分である。女工は手紙の中で，恋人が「破砕器の中へ嵌ま」ってしまい，恋人が「骨も，肉も，魂も粉々になっ」て絶命した悲惨な事件を告げている。女工の手紙には人間が破砕器の中へ嵌まっても，機械を止めることなく動かし続けて利益を最優先する社会の不条理さ，ひいては資本家の労働者に対する人間軽視の実態が一人称の文体で綴られている。加藤邦彦は手紙の特質を巧みに取り入れた小説が『セメント樽の中の手紙』であると指摘している[11]。もともと手紙には発信者が特定の受信者に向けて書くという特質があるのだが，この小説の場合，不特定者の受信者である「あなた」に向けられて書いた手紙という手紙の特質を変則した手法を取り入れている。読者に直接「あなた」と語りかける手紙の文体とその手紙に綴られた衝撃的な非業な死の内容から，読者は女工の手紙に引き込まれていき，まるで自分が手紙の受信者であるかのように読んでいく。そのために読者は女工の手紙に重点を置いて読むようになる。増田修は女工の手紙の文体・内容，そして「セメント樽の中の手紙」というタイトルに着目して「この作品の中では，女工の手紙の段がクライマックスであり，一番感動的である」[12]と言及している。『セメント樽の中の手紙』の授業実践では女工に返事を書く指導が多く報告されているが，それは第二段を重視していることに拠っている。

第三段は「松戸与三は，湧きかえるような，子供たちの騒ぎを身の回りに覚えた。」から「彼は，細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。」までの部分である。

第三段では女工の手紙を読み終えた与三の様子が三人称の視点から語られている。そのために，与三の心情は読者にはわからない。読者がわかるのは，女工の

手紙を読み終えた与三が「へべれけに酔っぱらいてえなあ。そうして何もかもぶち壊してみてえなあ。」とどなって，「細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た」という言動である。与三が女工の手紙をどのように受け止めたのかは，与三の心情がわからないので読者の想像に委ねられている。つまり，この小説は与三の労働の世界と与三の家庭の世界の間に女工の手紙が挟まれた三つの世界から成った作品構造になっている。また与三の労働の世界（第一段）･女工の手紙（第二段）・与三の家庭の世界（第三段）のそれぞれの段は一行空きになっているので，内容・表現方法・形式においてもこの小説は全三段にわけられる。『セメント樽の中の手紙』の作品構造を図式化すると次のようになる。



この図からわかるように，女工の手紙を読み終えた与三をどのように考えていくのかが指導をする際の大切なポイントになる。言い換えると，女工の手紙を読む前と読み終えた後の与三について考えることは，学習者にとって与三の現実を通して自分の現実を見つめるきっかけとなる。この点において，「女工の手紙を読むことで松戸与三はどう変容したのかという問いが作品によってはぐらかされてしまう」[13]という髙橋博史の指摘や，女工の手紙は第三段の与三の世界の構築のために戦略的に設定されたものなので，『セメント樽の中の手紙』は第三段の世界をどう読むかにかかっている[14]という前田角蔵の指摘は頷ける。以上の点を踏まえて，本稿は女工の手紙を読み終えた与三が語られている第三段に重点を置いた指導を考案していきたい。

３．女工の手紙を読む前の与三

松戸与三は発電所建設工事の現場でセメント樽の中のセメントを手作業でコンクリートミキサーに入れる労働をしている。172キロもあるセメント樽[15]を運び，一分間に「十才」(278リットル）を吐き出すコンクリートミキサーに間に合わせなければならない労働が非常に過酷であることが与三の「石膏細工の鼻」に象徴されている。与三の鼻が「石膏細工」のように「硬化した」のは十一時間の労働作業の中でほとんど休みなく働き続けて，自分の鼻を掃除する時間がなかったからである。与三は人間が機械に従属させられる逆転関係した労働を強いられている。そのために鼻を気にしながら掃除する時間のない与三の鼻毛は「しゃちこば」って「石膏細工の鼻のように硬化」してしまう。与三の鼻がもとに戻るのは「ヘトヘトになった」十一時間の労働から解放された後である。過酷な労働の日々の中で与三の唯一の楽しみは「一杯飲んで食う」ことであった。しかし，与三の唯一の楽しみは「一円九十銭の日当の中から，日に，五十銭の米を二升食われて，九十銭で着たり，住んだり，べらぼうめ！どうして飲めるんだい！」という言葉に端的に表れているように「一杯飲んで食う」こともままならない。一円九十銭の日当は大正末期から昭和初期当時の日雇人夫の賃金としては平均であった[16]のだが，与三は細君と六人の子供たちを養っていたので，与三が労働して得た日当の大部分は家族の米代などの生計費にあてられて，一杯の酒を飲む楽しみさえ奪われている。

セメント樽の中から小箱を見つけた際の与三の「軽いところを見ると，金も入ってねえようだな。」の言葉から生計費も十分にない貧窮した暮らしであるのが読み取れる。日々の過酷な労働で疲労困憊となり，貧しさから唯一の楽しみさえ奪われた与三は，小箱に金目のものが入っているのではないかと思わず期待している。裏を返すと，与三は「考える間もな」い労働をしながら，一杯の酒を飲むための金銭のことが頭から離れていないのである。与三が経済的にも精神的にも追いつめられて人間らしい幸せな生活からほど遠い暮らしを余儀なくされているのを表現した文章が以下である。

> 汗ばんだ体は，急に凍えるように冷たさを感じ始めた。彼の通る足下では木曽川が白く泡を噛んで，

吠えていた。

「チェッ！やり切れねえなあ，かかあはまた腹を膨らませやがったし，……」彼はウヨウヨしている子供のことや，またこの寒さを目がけて産まれる子供のことや，めちゃくちゃに産むかかあのことを考えると，まったくがっかりしてしまった。

「かかあはまた腹を膨らませやがった」や「ウヨウヨしている子供」という表現から与三は自分から人間らしい生活を奪う元凶は家族であると考えていることがわかる。当時は母体(優生)保護法がない時代であったので，避妊や妊娠中の中絶は許されていなかった。ここで注意したいのは，与三が自分を苦しい境遇に追い込んでいるのは細君と子供たちだと見做している点である。与三は自分が経済的にも精神的にも追いつめられた暮らしをしなければならないことを家族のせいにしている。与三は家族に対して不平不満を漏らしているが，家族ことを考えて一杯の酒を我慢している。ここから与三は物事を短絡的に考えるところはありつつも純朴な人間性であることが垣間見える。

与三が純朴であっても，次々に子供が産まれて生活が苦しくなっていく中で，与三は木曽川の水流さえ「吠えている」と追いつめられているように感じる。木曽川の水流の「吠えている」という擬人法の表現には行き場のない鬱屈した与三の心境風景が表されている。自分の鼻を掃除できない過酷な状況で十一時間の労働を終えても一杯の酒さえ飲めない辛さ，細君と子供たちによってますます困窮する家計，このような生活に耐えるしかない与三の人生は非人間的なものであろう。追いつめられた与三の怒りはセメント樽の中から見つけた小箱を「この世の中でも踏みつぶす気になって，やけに踏みつけ」る行動となる。与三の小箱を踏みつける行動について，松田章一の「抑圧への鬱積した怒り」[17]という指摘や上田博の「閉塞された心情の自己外化」[18]という指摘があるように，与三は自分を追いつめる元凶の家族に対する苛立ちをどうすることもできない。鬱積し，抑圧された心境を抑えられずに小箱を踏みつぶすことしか与三にはできない。与三の怒りは「この世の中」という自分の家族を含めた身近な世の中に対して向けられている。見逃してならないのは「この世の中でも」の「でも」とあるように，与三の怒りは家族を含めた身近な世の中であるのだが，怒りの対象はどこか漠然としているのである。

４．読者を引き込んでいく女工の手紙の仕組み

『セメント樽の中の手紙』の先行研究では，芳賀孝雄[19]・増田修[20]らの女工の手紙を重視する見解と，前田角蔵[21]・髙橋博史[22]・大塚敏久[23]らの女工の手紙ではなく与三の世界を重視する見解にわかれている。女工の手紙を重視する見解は，この小説がプロレタリア文学の系譜であることを踏まえて，資本家と労働者という階級の枠組みの中で女工の手紙を「労働者同士の連帯」という観点から捉えている。一方，与三の世界を重視する見解は，プロレタリア文学と女工の手紙を結びつけて読むではなく，プロレタリア文学という枠組みを超えてこの小説の本質を捉えるべきであるという観点に立っている。角谷有一の「現在，プロレタリア文学の作品が教科書教材として採用されることが極めて少なくなった中で，この作品だけが多くの教科書に採用されているのは，むしろ『プロレタリア文学』という枠組みを超えたところで，この作品が読者を引きつける力を持っている」[24]という指摘があるように，本稿ではプロレタリア文学という枠組みに捉われずに『セメント樽の中の手紙』の教材的価値を検討していきたい。女工の手紙が重要ではないというのではなく，プロレタリア文学と女工の手紙を結びつけた「労働者の連帯」という読みを指導する授業実践が行われて，すでに一定の成果と課題が報告されている。『セメント樽の中の手紙』の授業実践では「労働者の連帯」と読む指導が行われていて，授業で「労働者の連帯」と読んだ際の課題が報告されている。本稿ではその課題を踏まえて，学習者が与三の現実を通して自分の現実を見つめることができるようになる指導を考案していきたい。

与三が小箱を「踏みつけ」て出てきた女工の手紙には「破砕器の中へ嵌ま」って絶命した恋人のことを次のように綴っている。

仲間の人たちは，助け出そうとしましたけれど，水の中へ溺れるように，石の下へ私の恋人は沈んでいきました。そして，石と恋人の体は砕け合って，赤い細かい石になって，ベルトの上へ落ちました。（中略＝稿者）はげしい音に呪いの声を叫びながら，砕かれました。そうして焼かれて，立派にセメントになりました。

骨も，肉も，魂も，粉々になりました。私の恋人の一切はセメントになってしまいました。（中略＝稿者）私は私の恋人が，劇場の廊下になったり，大きな邸宅の塀になったりするのを見るに

忍びません。ですけれど，それをどうして私に止めることができましょう！あなたが，もし労働者だったら，このセメントを，そんな所に使わないでください。

いいえ，ようございます，どんな所にでも使ってください。私の恋人は，どんな所に埋められても，その所々によってきっといいことをします。（中略＝稿者）あなたが，もし労働者だったら，私にお返事をくださいね。その代わり，私の恋人の着ていた仕事着の切れをあなたに上げます。この手紙を包んであるのがそうなのですよ。（中略＝稿者）お願いですからね，このセメントを使った月日と，それから詳しい所書きと，どんな場所へ使ったかと，それにあなたのお名前も，御迷惑でなかったら，ぜひぜひお知らせくださいね。あなたも御用心なさいませ。さようなら。

この手紙には恋人を不慮の事故で失って気持ちの整理ができない女工の感情が看取される。衝撃的な事故で恋人を失った悲しみを女工は文面で率直に表現している。手紙という手法を用いたところにこの小説の独自性が認められるだろう。２章で前述したように，手紙は発信者が特定の受信者に向けて書くという特質があるのだが，この小説の場合，不特定者の受信者である「あなた」に向けられて書いた手紙という手紙の特質を変則した手法が取り入れている。つまり，女工の手紙にある「あなた」は与三であるとともに，与三と化して読んでいる読者にも向けられていて，女工の「あなた」という呼びかけには読者を誘い込むような仕掛けが施されている[25]。そのために読者は衝撃的な事故の内容のみならず「あなた」という呼びかけのレトリックによって女工の手紙に引き込まれていき，まるで自分が手紙の受信者であるかのように読むようになる。さらに読者が女工の手紙に引き込まれるのは「あなた」という呼びかけのレトリックだけではない。

女工の手紙には「あなたが，もし労働者だったら，このセメントを，そんな所に使わないでください。」と書きながら，すぐに「いいえ，ようございます，どんな所にでも使ってください。」と前述したことを翻している。恋人が絶命した後まで恋人の骨や肉や魂の入ったコンクリートが劇場や大邸宅といった資本家に関係する場所に役立つことが許せないのに，自分の力ではどうすることもできずにいる女工の感情の揺さぶりが文面から読み取れる。恋人の死をまだ冷静に受け止められていない女工の正直な感情や資本家に対する憤りを女工はありのままに表現している。読者は衝撃的な手紙の内容･「あなた」という呼びかけのレトリック・女工のありのままの正直な感情を表現した文体から，読者は女工の悲しみに共感し，女工の手紙に引き込まれていくのである。

５．女工の手紙を読み終えた後の与三

第三段の最初の「松戸与三は，湧きかえるような，子供たちの騒ぎを身の回りに覚えた。」という文章は，与三が子供たちの騒ぎに気がつかないほど熱心に女工の手紙を読んでいたことを示している。それほど与三が熱心に女工の手紙を読んだのは，女工の手紙の中に与三の心を引き付けるものがあったことが容易に想像できる。しかし，女工の手紙の一人称の文体とは異なり，第三段は三人称の視点から語られているために，与三の心情は読者にはわからない。読者にわかるのは女工の手紙を読み終えた与三が「へべれけに酔っぱらいてえなあ。そうして何もかもぶち壊してみてえなあ。」とどなって，「細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た」という言動だけである。この与三の「へべれけに酔っぱらいてえなあ。そうして何もかもぶち壊してみてえなあ。」という言葉について，田中実の「女工の恋人の運命は与三自身の未来でもあり，女工の手紙が身につまされるがゆえに，与三は自己の無力をいっそう強く感じて」いる[26]という指摘，前田角蔵の「女工の手紙を通して，与三は労働者一般の不幸，運命を感得し，女工の悲しみを共有した」[27]という指摘，高口智史の女工の手紙は与三に「搾取される労働者の危機を警告しただけではなく，与三にさらに深い存在論的な問いを提起した」[28]という指摘がある。三者に共通しているのは女工の手紙を読み終えた与三が労働者としての自分と向き合い，自分自身を対象化したという点である。

女工の手紙には「相当な働きをし」ていた恋人の労働者が破砕器に嵌まっても，破砕機を止めることなく動かし続けた資本主義の実態が告白されている。資本家が価値を置いているのは利益であって，労働者の生命を軽視して，労働者を非人間的に取り扱う労働現場の実情が明かされている。女工の手紙には，もし，破砕機を途中で止めていたら，恋人は絶命せずにすんだかもしれないというやりきれない悲しみが表出している。女工は手紙の中で「私はあの人に経帷子を着せる代わりに，セメント着を着せているのですわ！あの人は棺に入らないで回転窯の中へ入ってしまいましたわ。私はどうして，あの人を送って行きましょう。あの人は西へも東へも，遠くにも近くにも葬られているのですもの。」と恋人の死を悼んでいる。この女工の手紙の中の「送る」という言葉の意味は「葬送す

る」[29]であると坂本慎也が言及しているように，女工は「棺に入らないで回転窯の中へ入ってしま」った恋人に「経帷子」を着せられなかった代わりとして「セメント着を着せてい」ると言表している。すなわち，女工の心意には恋人を葬送する意図があったといえる。女工は恋人を弔うために手紙を書いたのであった。そのために恋人の骨や肉や魂の入ったコンクリートが使われた「月日」と「場所」，そして，恋人の葬送に関わった「あなたのお名前」を知る必要があった。だからこそ，手紙の中で女工は三度も「あなたが，もし労働者だったら，私にお返事をくださいね。」と懇願しているのである。この小説を「労働者の連帯」とする読みは，同じ労働者階級者であれば資本階級者の人間軽視に対する悲しみや憤りを共感し理解し合えるはずだという女工の心意を汲み取る観点から女工の手紙を捉えている。女工の手紙が入っていたのはセメント樽の中であるし，手紙の入れ方を考えると，女工は労働者が手紙を見つけることを見込んでいたといえよう。女工がセメント樽の中に手紙を入れたのは，労働者であれば自分の心意を理解してくれて，コンクリートが使われた「月日」・「場所」・「あなたのお名前」を知らせた返信を届けてくれるはずだという女工の期待が込められている。女工の心意は手紙を通して与三に伝わるものの，その手紙によって与三は労働者としての自分自身を見つめることになる。高口智史の「女工の手紙との出会いは，与三に欠落していたもの－自分が資本の奴隷的な存在であることへの疑義を芽生えさせることになった」[30]という指摘があるように，与三は女工の手紙を通して自分の現況を対象化したのである。女工の手紙を包んでいたボロ切れが絶命した恋人の仕事着であったことは，労働者の与三には女工の恋人の絶命が一層リアルに感じられ，まるで自分の先行きを暗示しているかのように受け止める。それが，与三の「へべれけに酔っぱらいてえなあ。そうして何もかもぶち壊してみてえなあ。」という言葉になって表出しているのである。ここで第一段と第三段に与三が「ぶち壊し」たいと言動をしている点に注目してみたい。

〈第一段〉
この世の中でも踏みつぶす気になって，やけに踏みつけた。

〈第三段〉
へべれけに酔っぱらいてえなあ。そうして何もかもぶち壊してみてえなあ。

（傍点・稿者）

第一段と第三段を比べるとわかるように，第一段の「世の中でも」という表現は家族を含めた身近な世の中に対する漠然とした憤りであった。しかし，第三段では「何もかも」の表現で与三の憤慨する対象が広がっている。「何もかも」という表現は自分を取り巻いている家族や社会のすべてに対する憤りへと変化したことを表している。少なくとも第三段の「何もかも」には自分の家族だけではなく資本主義社会に対する憤りが含まれていることは疑いないであろう。与三の「へべれけに酔っぱらいてえなあ。そうして何もかもぶち壊してみてえなあ。」という言葉は，女工の手紙によって与三が初めて資本主義社会の中の一人の労働者としての自分を対象化していることを表しているのである。

6．与三が変化した第三段の重要性

資本主義社会の労働者として自己を対象化することができた時，自分を取り巻いているすべてのものに憤った与三の見たものが「細君の大きな腹の中に」いる「七人目の子供」であった。

「へべれけに酔っぱらいてえなあ。そうして何もかもぶち壊してみてえなあ。」とどなった。
「へべれけになって暴れてたまるもんですか，子供たちをどうします。」細君がそう言った。
彼は，細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。

与三が「へべれけに酔っぱらいてえなあ。そうして何もかもぶち壊してみてえなあ。」とどなったのは，女工の手紙を読み，労働者が人間として否定されている事実を認識したからである。自分が経済的にも精神的にも追い込まれているのは家族であるよりも貧しさを生み出す社会制度が元凶であることを与三は認識したのである。与三は自分が置かれている過酷な現実を目の当たりにする。大塚敏久が「作者の意図が手紙の中身にあったというのであれば，第三段のような話を続けて描き出す必要はない」のに，「作者は第三段を続けて書いたのである。そのことの意味を読み手は受け止めるべきである」[31]と述べているように，第三段における与三の変化，そして第三段の与三の「へべれけに酔っぱらいてえなあ。そうして何もかもぶち壊してみてえなあ。」という言葉，「彼は，細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。」という最後の一文は『セメント樽の中の手紙』を理解する上で重要である。この最後の一文は読者によって「七人目の子供が産まれることで与三の生活がさらに困窮することを暗示し

ている」という読み，「七人目の子供の生命の誕生から人間の生命の尊さを実感する」という読み，「七人目の子供を見る与三から父親としての責任や自覚が芽生える」といった読みのように多義的になることが想定されるので，小説教材として学習する上で要点になるところであろう。この小説では女工の手紙が与三にどのような影響を与えたのかを問うことで，学習者は与三が現実を見つめ直す有り様を通して，学習者は自分自身の現実を見つめることができるようになる。したがって，本稿では学習者が自分の現実を見つめられるような読みを目指して，与三の変化を中心にした，とりわけ女工の手紙を読み終えた与三が語られている第三段を重点に置いた指導を考案していく。

7．マンガを活用した小説教材の学習指導の考案

『セメント樽の中の手紙』の教材性を生かして，学習者が自分自身の現実を見つめることができるような読みになるために，本稿ではマンガを活用した指導を提案したい。１章で取り上げた野中幸子は「労働者同士の連帯の素晴らしさを理解させる」ことを目指して，「女工に対し，私たちはかわいそうだと同情しました。与三は『へべれけに酔っぱらいてえなあ。そうして何も　かもぶち壊してみてえなあ。』とどなった。どうして私たちと与三の反応が異なっているのでしょう。」という発問をしている。この発問は学習者と与三との立場の違いを明らかにして，学習者に与三の心境を理解させようとしたものであった。だが，野中は「与三と生徒との立場の違いをはっきりさせることはできても，それ以上の発展は望めなかった。」と報告している[32]。野中は「与三の身になって女工への手紙を書く」という学習指導にも取り組んでいて，この小説を理解させるための工夫した指導を行っている。青嶋康文は学習者に小説の細かな表現に着目させる授業をした後で，学習者の読みを重んじて，一次感想文と二次感想文を書かせる授業を行ったのだが，与三の現実を通して自分の現実を見つめる読みができたのは一人の生徒しかいなかったと言及している[33]。両者とも学習者の読みを深めるための工夫した指導を行い，一定の成果が認められたものの，課題が残されたことを報告している。両者の授業実践の報告から『セメント樽の中の手紙』は指導するのが容易ではない小説教材であるといえよう。そこで学習者が与三を通して自分自身を見つめ直していく読みを育成するには，第三段が大切であるという見解から指導案を考えていく。『セメント樽の中の手紙』には藤宮史による原作を忠実に表現した木版漫画[34]があるので，木版漫画を活用して，学習者の読解力の育成を図っていきたい。

道田泰司は大学生を対象にしてマンガを活用した授業実践を行い，マンガを活用することで読みが深められるのかについて検証を行った[35]。その結果，132名の学生の中でマンガを活用した授業に否定的であったのは１名しかいなかったことが報告されている。マンガを活用した授業を受けた学生は「授業として新鮮で面白い」・「授業に対する興味が湧く」・「授業内容が理解しやすい」・「どんな状況のことを言っているのかわかりやすい」・「要点が端的に捉えられる」・「インパクトがあり印象に残る」などと回答していて，マンガは「多くの学生に受け入れられる良質の教材」であることが確認されている。また，向後智子と向後千春はマンガを活用した学習の効果を検証した結果，「深い理解を促進し，学習に対する関心を高めることにつながる」ことや「マンガ表現の持つ面白さや新奇性の効果」によって「何が問題とされているのかが明確にな」って，「それが学習への動機づけとなり，ひいては内容の理解の促進につながる可能性」が認められた[36]と説明している。これらの検証結果から，マンガを活用した授業は，学習者が教材に対する興味や関心を高めて，積極的に授業に参加するだけではなく，教材の内容をより深く理解できる効果を期待できることが明らかになった。

以上を踏まえて，第三段を表現したマンガを活用して，学習者が自分自身の現実を見つめるようになる読みの育成を図っていく。そのために与三が女工の手紙によって初めて資本主義社会の中の一人の労働者としての自分を対象化したところを表現したマンガを授業に取り入れる。次のページにあるマンガは全14ページの最終頁にあたる。この最終頁には『セメント樽の中の手紙』の学習指導について説明するために①から④の数字を表記した。授業でマンガを使用することを意図して，②のコマの与三の言葉と③のコマの細君の言葉，そして④のコマに表記されていた文末の「彼は，細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。」という文章を削除している。授業では第一段と第二段までを学習者に読むように指導し，第一段と第二段を読み終えてから，第三段の②のコマの与三の言葉と③のコマの細君の言葉を表現する言語活動を提案したい。原作では②のコマには「へべれけに酔っぱらいてえなあ。そうして何も　かもぶち壊してみてえなあ。」という与三の言葉が表現されている。この与三の言葉にある「へべれけ」や「何もかも」という表現には，与三を取り巻いている家族や資本主義社会といったすべてものに対して，与三が耐えきれない鬱屈した気持ちを

①

彼は手紙の
終りにある
住所と名前とを
見ながら、茶碗に
注いであった酒を
ぐっと一息に呷った。

②

と呶鳴った。

③

細君がさう云った。

④

完

抱いていることを表している。学習者の考えた②のコマの与三の言葉について学習者同士で比較し合うことで，小説には多様な読みがあることを学ぶことができる。さらに原作の与三の言葉についても比較し合うと，原作の優れた文章の表現を味得し，文書表現から与三の耐え難い鬱屈した感情が読みとりやすくなるであろう。与三の耐え難い鬱屈した感情が生まれたのは，女工の手紙がきっかけであるので，第一段の与三と第三段の与三を比較することで，与三の耐え難い鬱屈した感情の対象が明確になり，学習者は与三が閉塞的な状況に置かれている実態を把握できるようになる。

③の細君のコマには語り手の「細君がさう云った。」が表現されている。与三は細君のことを「嬶」と言い表していることから，「細君がさう云った。」という表現は与三や細君の台詞ではないことをマンガは描出している。このマンガの③のコマでは「細君」が語り手の表現であることが学習者にわかりやすく描出されている。『セメント樽の中の手紙』の第一段と第三段は三人称の視点から語っている点に特徴が見られる。語り手が三人称の視点から語っていることを「細君がさう云った。」の文章が示しているのである。②のコマの与三の言葉を受けて，③のコマの細君がどのような言葉を与三に話しているのかは学習者によって解釈が異なるために，学習者同士で比較したり，また原作と比較したりすることで読みを深められる。

④のコマに関しては二通りの指導が考えられる。一つ目は，最後の一文の「彼は，細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。」を削除して，最後の一文を学習者に考えさせる指導である。二つ目は④のコマ自体を削除する方法である。①から③のコマを学習者に見せた後で，学習者に最後にどのような場面が想像できますかと問うて，そこから最後の一文を表現させる指導である。二つ目の指導案の方が④のコマ自体を削除して，その代わりに学習者に④のコマにあたる最終場面と最後の一文を考えさせるので，④のコマに関する一つ目の指導案よりもさらに多様な解釈が出ることが想定される。これらの指導案は原作との比べ読みや学習者同士の解釈を比較することで理解が深められることを念頭に置いている。語り手が最後に「彼は，細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。」と語ったのは，七人目の子供が産まれることで与三の生活が一層困窮することを示唆している。与三はますます経済的にも精神的にも追いつめられていき，過酷な事態になることが予想される。語り手が与三の過酷な先行きを読者に示唆したのは，与三を通して読者に過酷な状態に直面した時にどのように向き合って困難な問題を乗り越えていくのかを問うているためである。原作の優れた文章の表現を味得するのは，与三の閉塞的な心境を理解する上で骨子となる。原作の表現を味得したり，語り手ひいては作者の意図を捉えて相対的に自分が表現した言葉や解釈について考えたりすることは，学習者にとって表現力や読みの力だけではなく，与三を通して自分自身を取り巻く現実の社会やこれからの生き方に対する考え方を批評できるようになるだろう。玉田圭作はマンガの読みの方略を検証した結果，マンガを部分的に読む部分方略を用いるほど，登場人物の心情の理解度が高くなることを明らかにした[37]。『セメント樽の中の手紙』の授業実践でマンガを活用した指導を行ったという論考は管見の限り見当たらない。本稿はこれまでの『セメント樽の中の手紙』の授業実践で報告された課題を考慮して，マンガを部分的に読む方略を応用した指導を考案している。マンガを活用した指導は様々な有効性が認められているので，国語科教育におけるマンガを活用した指導のひとつとして提出したい。

【注】

1　筑摩書房のホームページで紅野謙介は『セメント樽の中の手紙』を再び高等学校の教科書教材として採択した理由について述べている。詳しい理由については以下の URL に載っている。
https://www.chikumashobo.co.jp/kyoukasho/textbook/list/editors-message1.html
（2015年9月30日確認）

2　『セメント樽の中の手紙』の教材史について小野牧夫は簡潔にまとめている。（小野牧夫『国語・文学教育の研究』，1985年4月，pp.82-84）

3　長谷川泉「セメント樽の中の手紙－現代文の鑑賞・その七－」（『国文学 解釈と鑑賞』第18巻10号，至文堂，1953年10月，p.118）

4　浦西和彦「「セメント樽の中の手紙」をめぐって」（『国語通信』第281号，筑摩書房，1986年）

5　「労働者の連帯」というテーマに価値を置いている論者に芳賀孝雄・川端俊英・上田博・増田修・祖父江昭二らが挙げられる。

6　野中幸子「読みを深める討論指導－『セメント樽の中の手紙』の取り扱いの場合－」（『国語教育研究』，第34号，広島大学教育学部国語科光葉会，1991年6月）

7　青嶋康文「定時制生徒と「セメント樽の中の手紙」」（『日本文学』第37巻第11号，日本文学協会，1988年11月）

8　注１に同じ

9　注７に同じ（pp.51-54）

10　注６に同じ（p.88）
11　加藤邦彦「届けられた手紙，送られる返信－葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」論－」（『梅光学院大学論集』第45巻，梅光学院大学，2012年1月，p.13）
12　増田修「葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」」（『国語教材研究講座（上巻）』，有精堂，1984年，p.95）
13　髙橋博史「セメント樽の中の手紙」（『〈新しい作品論〉へ，〈新しい教材論へ〉３』，右文書院，1999年6月，p.220）
14　前田角蔵「「セメント樽の中の手紙」論」（『日本文学』第37巻第10号，日本文学協会，1988年10月，pp.27-28）
15　松田によると，昭和8年頃のセメント樽の重さは172キロであったことが記されている。松田章一「『セメント樽の中の手紙』その構成」（『近代文学論集－研究と資料－』，教育出版，1978年3月，p.21）
16　祖父江昭二「「セメント樽の中の手紙」－新しい女性像と原点的な労働者像の対照的な交錯－」（『講座 現代の文学教育（中学・高校小説編）』第４巻，1984年5月，p.1）
17　注15に同じ（p.23）
18　上田博「「セメント樽の中の手紙」の一視点－教材として深めるために－」（『新国語研究』第21号，大阪府高校国語研究会，1977年，p.18）
19　芳賀孝雄「葉山嘉樹･セメント樽の中の手紙」（『国文学』第14巻第8号，學燈社，1969年6月，p.61）
20　注12に同じ（pp.95-96）
21　注14に同じ（p.216）
22　注13に同じ（p.33）
23　大塚敏久「「セメント樽の中の手紙」の教材研究」（『〈新しい作品論〉へ，〈新しい教材論へ〉３』，右文書院，1999年6月，p.240）
24　角谷有一「作品の深みでメッセージを受けとる－『セメント樽の中の手紙』の場合－」（『月刊国語教育』第20巻第2号，東京法令出版，2000年5月，p.56）
25　注24に同じ（p.58）
26　田中実「〈他者〉へ」（『日本文学』第37巻第7号，日本文学協会，1988年7月，p.77）
27　注14に同じ（p.29）
28　高口智史「教材論「セメント樽の中の手紙」－国語教育における人権の視点－」（『近代文学研究』第16号，日本文学協会近代部会，1998年12月，p.85）
29　坂本慎也「「セメント樽の中の手紙」論」（『大谷中・高等学校研究紀要』第37号，大谷中・高等学校，2004年4月，p.11）
30　注28に同じ（p.86）
31　注23に同じ（p.241）
32　注６に同じ（p.88）
33　注７に同じ（p.51）
34　葉山嘉樹作・藤宮史版画『木版漫画 セメント樽の中の手紙』（黒猫堂出版，2009年4月）この木版漫画は第12回文化庁メディア芸術祭審査委員会の推薦作品であり，第７回アックスマンガ新人賞を受賞している。
35　道田泰司「マンガを用いた授業実践の試みとその評価」（『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』第53巻，1998年10月）
36　向後智子・向後千春「マンガによる表現が学習内容の理解と保持に及ぼす効果」（『日本教育工学会論文誌』第22巻第2号，日本教育工学雑誌，1998年）
37　玉田圭作「文脈とマンガの表現形式が読みの方略に与える影響」（『慶応義塾大学大学院 社会学研究科紀要』第73巻，慶応義塾大学大学院社会学研究科，2012年）

＊本文引用は筑摩書房の『国語総合』（2014年発行）に収録された『セメント樽の中の手紙』に拠っている。